

「自己の生き方について考えを深める児童の育成」 ～物事を多面的・多角的に考えるための発問の工夫を通して～

前橋市立敷島小学校 鈴木 博之

I 主題設定の理由

道徳教育において、小学校では平成30年度から教科化され、今まで以上に量的確保と質的転換の改善が求められるようになった。

小学校学習指導要領において「特別の教科 道徳」（以下、道徳科）の目標には、「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。」ことが示された。

この道徳科の目標の意味するところから、道徳科の学習では、ねらいとする道徳的諸価値について自己を見つめ、これからの生き方に生かしていくことを見通しながら、どうしてそのような問題が生まれるのかを調べたり、他者の考え方や感じ方を確かめたりしながら課題解決に向けて話し合うことが求められていると捉えることができる。だからこそ、道徳科における問題の解決に向けて、児童が物事を多面的・多角的に考えられることは重要であり、自己の生き方について考えを深められるような発問をすることが大切になってくるのである。

また、本県では「はじめよう！道徳科」（平成30年3月群馬県教育委員会）において「考え、議論する道徳」の中で「考える」とは「問題意識をもつこと」、「自分との関わりで考えること」、「自己を振り返ること」としている。「議論する」とは「多面的・多角的に考えること」としている。

この本県が目指している道徳科の「考え、議論する道徳」とは、「主体的・対話的で深い学び」の実現と重なるところもある。児童にとっての主体的な学びの姿とは、自ら考えをもち、考えたことを書いたり発表したりすること、つまり、問題意識をもったり、自分との関わりで考えたりしている姿である。また対話的な学びの姿とは、友達や教師等と話し合う中で多様な考えに触れ、物事を多面的・多角的に考える姿である。そして、ねらいとする道徳的価値について教師が明確な意図をもって発問をすることが深い学びにつながり、児童の道徳性を育むことにつながると考える。

これらのことを受け、場面や意図に応じて、物事を多面的・多角的に考えるための発問を工夫することで、自己の生き方について考えを深める児童を育成することができると考え、研究を進めることとした。

II 研究のねらい

道徳科の授業において、自己の生き方について考えを深めることができる児童を育てるために、場面や意図に応じて、物事を多面的・多角的に考えるための発問を取り入れていくことの有効性を授業実践を通して明らかにする。

III 研究の内容

1 物事を多面的・多角的に考えるための発問の工夫について

発問の工夫とは、ねらいや児童の実態に応じて児童の考えを引き出したり、広げたり、深めたりする教師の問いであると考えられる。

本県では物事を多面的・多角的に考えることを「はばたく群馬の指導プランⅡ」の中で、「多面的に考えるとは、一つの道徳的価値について違う側面から見ることであり、多角的に考えるとは、中心的な道徳的価値から関連する道徳的価値に広がりをもたせること」と定義されている。

このことを受け、本研究では「多面的に考えるとは、ある事象を様々な方向から考えること」と捉える。例えば「親切、思いやり」はいいことであるという理解だけでなく、行動にうつすのは難しい場合もあることなど、「親切、思いやり」については様々な感

じ方や考え方があるという方向から考えることである。また、「多角的に考えるとは、一つの道徳的価値について学習するときに、その道徳的価値に付随する価値も関連付けて考えること」と捉える。例えば、「親切、思いやり」を行動に表すには「勇気」が必要であったり、親切にしたときには「よりよく生きる喜び」を感じたり、教師が意図的に道徳的価値を関連付けて行うことである。

そこで、物事を多面的・多角的に考えるよさを考えたとき、生活をふり返り実践意欲の高揚が見られたり、活動への具体的な願いがもてたり、多様な考えに触れることで自分には今までなかった考えに出会えたりできることなどが挙げられる。

そして、それらが児童同士の考えを深める中心的な学習活動につながることである。児童の内面にある道徳的価値への感じ方や考え方は様々であり、それを児童ひとりひとりが自己と向き合って考えを深め達成していくことが大切であると考えられる。

授業実践においては、例えば、導入場面では内容項目の本質的なことを考えたときに、児童は内容項目について思っていたこととずれを生じたり、友達の考えを聞くことで共感したりすることもある。展開場面では、物事を多面的・多角的に考えられる発問から、児童は友達の考えを通して多様な考えに触れることができる。そして、終末場面では友達から出された多様な考えを活用しながら、内容項目について再考することができる。

このように、児童が授業実践において物事を多面的・多角的に考えるための発問は、授業展開の場面や発問の意図や役割などで整理、類型化することで教師が明確な目的をもって効果的に発問できるのではないかと考えた。

表1 児童が場面や意図に応じて、物事を多面的・多角的に考えるための教師の発問の類型化

	発問の意図	具体的な教師の発問	児童の具体的な姿
導入場面	ねらいの方向付けをする発問 (これまでの経験、日常生活場面などから問題提起)	<ul style="list-style-type: none"> ・「親切にしたことはありますか。」 ・「優しくしてもらったことって、どんなことですか。」 ・「きまりが大切だとは分かっているけれど、どうして大切なのだろうか。」 	<ul style="list-style-type: none"> ・道徳的価値に関する興味関心を高めることができる。 ・考える事柄についての自分の考えを明確にすることができる。
展開場面	自分とのかかわりを考える発問	<ul style="list-style-type: none"> ○立場を変えて考えさせる発問 ・「自分が○○ならばどのように考えるだろうか。」 ○状況を変えて考えさせる発問 ・「もし、この人が他人でも同じことをしますか。」 	<ul style="list-style-type: none"> ・教材を自分とのかかわりで深く捉えようとする。
	異なる立場から見る発問	<ul style="list-style-type: none"> ・「Aさんはどんなことを思っているだろうか。」 ・「Bさんはどんなことを思っているだろうか。」 	<ul style="list-style-type: none"> ・物事を異なる立場から見ることで、多面的に考えることができる。
	「もし」を問う発問	<ul style="list-style-type: none"> ・「もし、結果が違っていても主人公は同じ反応をしたと思いますか。」 	<ul style="list-style-type: none"> ・別の結果を考えることで、視点を逆にして考えることができる。
	対比して考えさせる発問	<ul style="list-style-type: none"> ・「○○なことと△△なことは一緒にできるのだろうか。」 ・「○○と△△の考えはどんな違いがあるだろうか。」 ・「○○と△△ではどちらが□□だろうか。」 	<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの違いを明確にしたり、共通点を見出したりできる。
	問い返すことで新たな展開	<ul style="list-style-type: none"> ・「○○さんの言っていることは、どういうことだ。」 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童同士で友達の考えを共

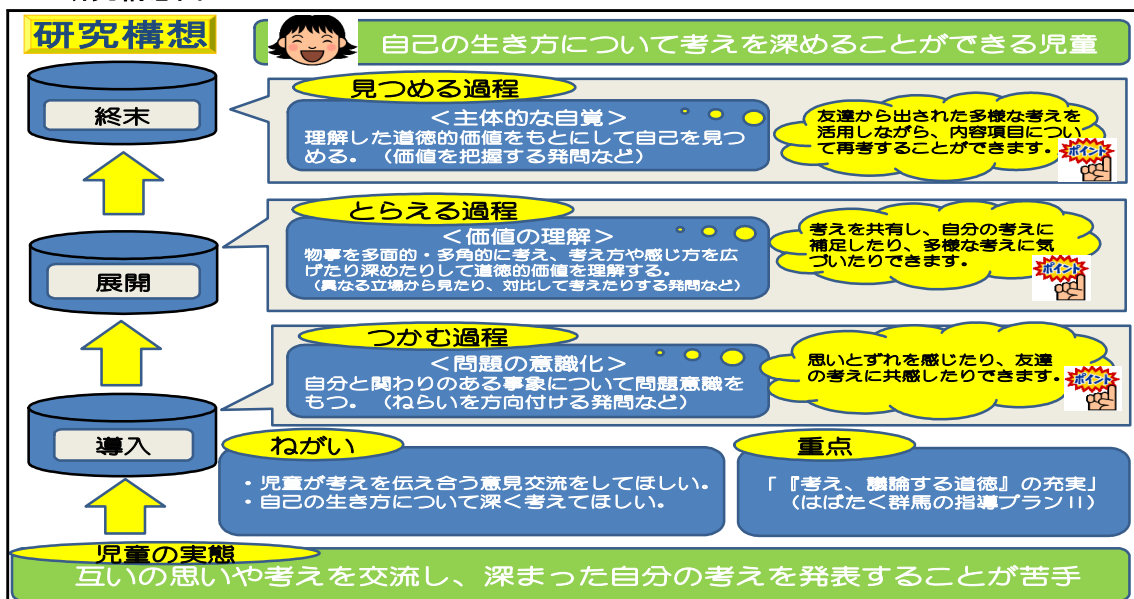
	が生まれる発問	といますか。」	有することができる。
	前提をひっくり返す発問	・「目標をもって努力してきたけど、もし、目標が叶わなかったら、その人のやってきたことは無駄だったのだろうか。」	・発想をさらに豊かにすることができる。
	自分を見つめる発問	・「〇〇するのに大切な心は何だと思いますか。」	・人間理解と向き合いながらも、それを乗り越えるための心を考え始めようとする。
終末場面	価値を把握する発問	・「新しい発見がありましたか。あったとすればそれは何ですか。」	・新たな価値や様々な考え方や感じ方があることに気づくことができる。
	実践を問う発問	・「どうすれば思いやりを行動にあらわせますか。」	・実践意欲につなげることができる。

2 「道徳授業構成表」の活用について

教師による発問は、児童の思考や話し合いを進めていく上で重要になってくる。発問によって児童の問題意識や疑問などが生み出され、多様な感じ方や考え方が引き出される。そのためにも、児童の意識の流れを予想し、それに沿った発問や考える必然性のある発問、自由な思考を促す発問などを取り入れていくことが大切になってくる。

そこで本研究では「道徳授業構成表」（次ページ実践例に記載）を活用していくこととした。この道徳授業構成表は、児童がねらいに迫ったり、考えを深めていくために大まかな発問を記入したものである。また、それぞれの内容項目の発展性や特質及び児童の発達段階などを全体にわたって理解し、児童が主体的に道徳性を養うことができるようになることを考えた。そのため、内容項目の全体像を把握できるように、小学校学習指導要領解説「特別の教科 道徳」より内容項目ごとの概要、学年段階ごとの指導の要点を示している。これらのことと1単位時間で行う教材を考えながらねらいを設定することで、より授業の組み立てを明確にできると考えた。

IV 研究構想図



V 実践例

5年 道徳授業構成表		教材番号	15	2																
1	教材名	のりづけされた詩																		
2	内容項目（主題名）	A—正直，誠実（自分の心にせいじつに）																		
<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;"> <p><学習指導要領></p> <p>[正直，誠実] 〔第1学年及び第2学年〕 うそをついたりごまかしをしたりしないで，素直に伸び伸びと生活すること。</p> <p>〔第3学年及び第4学年〕 過ちは素直に改め，正直に明るい心で生活すること。</p> <p>〔第5学年及び第6学年〕 誠実に，明るい心で生活すること。</p> </div> <div style="width: 45%;"> <p><ねらい></p> <p>本にある詩を写して自分の詩として提出してしまった和枝が，先生に打ち明けたときのつらさや苦しさを捉えることから，誠実に明るい心で生活しようとする心情を育てる。</p> <p><考えさせたいこと></p> <p>和枝が本に載っている詩を書き写したことを先生に打ち明けた行動を考えることを通して，誠実な生き方について考えさせたい。</p> </div> </div>																				
3	本時の展開	<table border="1"> <thead> <tr> <th>過程</th> <th>時間</th> <th>主な発問と児童の思考</th> <th>指導上の留意点・支援</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>導入</td> <td>5分</td> <td>テーマ発問 「正直とはどういうことでしょうか。」 「正直っていいことですか。」</td> <td>・児童のもっている「正直」の概念を確認し、課題意識をもたせる。</td> </tr> <tr> <td>展開</td> <td>35分</td> <td>補助発問 「和枝が本に載っている詩を書き写してしまったのは、どのような気持ちがあったからでしょうか。」 『「いい詩ね。」「いい題名だね。」と言われたとき、和枝はどのような気持ちになったのでしょうか。』 中心発問 「どんな思いから、和枝は自分のしたことを先生に打ち明けたのでしょうか。」</td> <td>・いけないことだとは分かっているが、それをしてしまう人間の弱さを考えさせる。 ・本にある詩を自分の詩に使ってしまった和枝の気持ちを考えることを通して、誠実な行動ができないときの考え方や感じ方を話し合わせる。 ・正直になって行動しようとしたときの考え方や感じ方を話し合い、価値理解を深める。</td> </tr> <tr> <td>終末</td> <td>5分</td> <td>最後のテーマ発問 「本当の正直とはどういうことでしょうか。」</td> <td>・「初めて気づいたこと」、「いいなあと思ったこと」や自分の今までの生活をふり返りながら、正直についての自分の考えを道徳ノートにまとめるように指示する。</td> </tr> </tbody> </table>			過程	時間	主な発問と児童の思考	指導上の留意点・支援	導入	5分	テーマ発問 「正直とはどういうことでしょうか。」 「正直っていいことですか。」	・児童のもっている「正直」の概念を確認し、課題意識をもたせる。	展開	35分	補助発問 「和枝が本に載っている詩を書き写してしまったのは、どのような気持ちがあったからでしょうか。」 『「いい詩ね。」「いい題名だね。」と言われたとき、和枝はどのような気持ちになったのでしょうか。』 中心発問 「どんな思いから、和枝は自分のしたことを先生に打ち明けたのでしょうか。」	・いけないことだとは分かっているが、それをしてしまう人間の弱さを考えさせる。 ・本にある詩を自分の詩に使ってしまった和枝の気持ちを考えることを通して、誠実な行動ができないときの考え方や感じ方を話し合わせる。 ・正直になって行動しようとしたときの考え方や感じ方を話し合い、価値理解を深める。	終末	5分	最後のテーマ発問 「本当の正直とはどういうことでしょうか。」	・「初めて気づいたこと」、「いいなあと思ったこと」や自分の今までの生活をふり返りながら、正直についての自分の考えを道徳ノートにまとめるように指示する。
過程	時間	主な発問と児童の思考	指導上の留意点・支援																	
導入	5分	テーマ発問 「正直とはどういうことでしょうか。」 「正直っていいことですか。」	・児童のもっている「正直」の概念を確認し、課題意識をもたせる。																	
展開	35分	補助発問 「和枝が本に載っている詩を書き写してしまったのは、どのような気持ちがあったからでしょうか。」 『「いい詩ね。」「いい題名だね。」と言われたとき、和枝はどのような気持ちになったのでしょうか。』 中心発問 「どんな思いから、和枝は自分のしたことを先生に打ち明けたのでしょうか。」	・いけないことだとは分かっているが、それをしてしまう人間の弱さを考えさせる。 ・本にある詩を自分の詩に使ってしまった和枝の気持ちを考えることを通して、誠実な行動ができないときの考え方や感じ方を話し合わせる。 ・正直になって行動しようとしたときの考え方や感じ方を話し合い、価値理解を深める。																	
終末	5分	最後のテーマ発問 「本当の正直とはどういうことでしょうか。」	・「初めて気づいたこと」、「いいなあと思ったこと」や自分の今までの生活をふり返りながら、正直についての自分の考えを道徳ノートにまとめるように指示する。																	

VI 研究の成果と課題

1 成果

- 多面的・多角的に考えるための発問を類型化し、具体化したことで、授業の中で、どのような発問を行えばいいのかが、どの場面で行えばいいのかが明確になった。
- 「道徳授業構成表」を作成し、授業で活用したことで、1時間の授業の流れが分かり、授業の中でのねらいを明確にして授業を行うことができた。

2 課題

- すべての発問が多面的・多角的に考えられる発問ではないので、発問の意図を吟味して授業の中に組み入れていく必要がある。
- 「道徳授業構成表」を効率的に作成できるように、「考えさせたいこと」や「主な発問と児童の思考」に重点を置くことで、授業の中でどんなことを押さえたいかを明確にできるようにしていく。